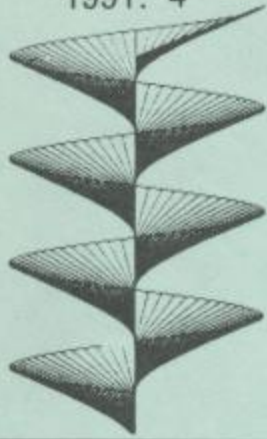


1991. 4



お経にくす

No. 25

大阪工業大学図書館報

によぜがもん

お経の中には によぜがもん という言葉で始まるものが多い。

日本では、家の宗教が仏教である家庭が多いから、自分の信仰は別としても、法事や仏事の際にこの言葉を聞いた人も数多いと思われる。

何を言っているのかさっぱり意味がわからない時に、まるでお経を唱えている様だと言われるが私も中学生の低学年の頃迄この言葉の意味がさっぱりわからず、お経の枕詞みたいなもので、とにかくお経は坊主が によぜがもん と言って始まるものだと思うだけで、ながったらしいお経を、足の痛いのを我慢しながら、ひたすら早く終わってくれることを願ったものである。

あるとき、たまたま仏壇の中にあつたお経を開いて見ると、書きだしの所に「如是我聞」と書かれていた。

によぜがもんとは、我かくの如く聞く、つまりおしゃか様が弟子である私たちに、仏の道について、この様に教えて下さいました、という意味であることが始めて解つた。

学生諸君は小学校入学以来、10数年にわたって学んできた、学ぶとはまねぶ、つまりまねるからでた言葉である。偉大な先人、学者達が苦勞の末築きあげてきた人類の英知を、先生から教わり学んできたが、学歴が進むに従って学ぶことの範囲が広がり、授業時間の関係もあって、先生が教えてくださることはその学問領域の基礎的部分だけになる、学部、大学院と進むに従って内容がますます高度となり、参考文献を調べるが必要になる。私は最近になって、

図書館長

増尾 龍一



如是我聞、つまり聞くこと、学ぶことの大切さをますます強く感じるようになった。

論語の文の書きだしは大てい、「子曰」(しいわく、またはしのたまわくと読む)である。これも孔子様がこの様に私たちに教えて下さいましたで始まる。

論語学而編に「学びて時にこれを習う、またよろこばしからずや」と言う名文があり、姉妹校の摂南大学では、これからとて図書館報は学而と名づけておられる。意味は易しいので解説の必要もなくおわかりと思う。

同じ論語の中に「学んで思わざれば則ちくらし、思いて学ばざれば則ちあやうし」とある。個人的な好みではこの言葉の方が私は好きである。

「先人の教えを学ぶだけで、自分で思索、研究しなければ道理も明らかにならず進歩もない。思索だけして、学ぶことを怠れば独善的となる危険がある」

大学は学問研究の場であり、これは学部、大学院どちらにも大切である。図書館は先人の学問の成果を収めた宝庫である。先生方や学生諸君の学問研究の進歩発展のために、図書館のはたす役割は大きい。

この度新しく図書館長を命ぜられた。格段の気負いも抱負も無いが、諸先生方の御協力をえて、少しでも工大発展のお役にたつことを願っている。

機械工学科教授・工学博士
本年4月から図書館長に就任

図書館とのつき合い方

私が初めて図書館を利用したのは、一年次の春であった。その時は専門の課題が出されていたので、レポートの参考資料を探しに足を運んだ。

一時間ほど色々見て決めたが、結構たくさん種類の本があり、借りた後も他の本の方が良かったかもしれないとくやんでいたのを今でも覚えている。

その後も課題が出される度、図書館へ行って資料を集めた。資料収集のための図書館利用を二年間ぐらいしていたことになる。だから専門図書以外は読んだ事がなかった。

三年次になっても課題が出されると図書館のお世話になっていたが、ある時、何かの用事で一時間程余裕時間が出来てから少し利用法が変わった。

一時間というのは、長いような短いような、中途半端な時間で、一人で茶店に入ってお茶を飲むのも気が引けた。友人の一人が暇な時は図書館へよく行くというのを思い出して、私もそうしようと思った。

ところが、いつも専門図書のお世話になっているせいか、その他の本がどのように並んでいるのかよく分からない。

三年にもなって図書館の中を散策するのは恥かしいので、涼しい顔をして適当に何気なく歩いていたら大きな字で『数奇屋』と書かれた本

工大・IB4

堤 みどり



に目が止まった。一体何の事を指しているのか意味が分からない。この題名の本に一目ぼれとまではいかないが、それに似たものを感じた。

両手に持って少し力を入れないと、本棚から出てこないその本は、日本の住居に関する本で禁帯出のシールがはってあり、いかにも偉そうであった。また、隣に並んでいる本も『茶室大観』という題のもので同じ様な雰囲気があった。

さっそく椅子に座りページをめくり出すとこれが意外に面白い。住居に関してさしたる知識の無い私にでも理解しやすい説明文と、美しい写真の数々。気を良くした私はその隣にある『茶室大観』などにも手を伸ばしていた。

夢中で読んでいたおかげで、とうとう一時間以上も図書館にいて約束の時間に遅れてしまった。それ以来日本の伝統美の本を良く読むようになった。

読書というと堅苦しい感じがするかも知れないが、自分と相性のよい本をみつければ、その本の面白さや本の世界がよく分ると思う。

本も人間と一緒に、つき合い方によっては、良き友、良き先生になったりすると思う。

だから私は、図書館に埋れている相性の良い本を探しに暇な時に行くようにしている。

一句を帰宅後寸分違わず書き写したというとてもない記憶力の持主。

この異常な才能はその後の米英遊学中にもいかに発揮され、ことに英国科学雑誌Nature誌上での活躍ぶりは、“ニッポンのクマグス”の名をほしいままにさせた。誌上熊楠は欧州の著名な学者・理論家を相手にしばしば論争を挑み、該博な知識と綿密な考証力で論敵を次々となぎ倒したという。

この巨人伝説は帰国してからもその人間くささとあいまって、話は一段と面白くなるのであるが、(紙幅も尽きたので)あとは皆さんの読書の愉しみに譲りたい。なお神坂次郎『縛られた巨人』(913.6 K)の併読もお勧めします。

(P.Q)

〔請求記号 913.6 T 第1図書室、『南方熊楠全集 全12巻』(081 M)も所蔵〕



『巨人伝』

津本陽著

(文藝春秋)

みなかたくまぐす

南方熊楠の伝記小説である。皆さんはこの名をご存じであろうか。個人全集もあり、民俗学や博物学、粘菌学などの方面では隠れもない大家なのだが、一般にはさほど知られていない。

ところがこの熊楠、人気作家の津本陽や神坂次郎が口を揃えて“巨人”と称揚し、畏敬するほどの超特大スケールの人物らしい。

南方熊楠(1867~1941)は和歌山の商家の出。幼少時よりその特異な才能は周囲の刮目するところで、例えば本屋で立ち読みした書物の一字

シリーズ 淀川ぶらり散策

第16話

「うたかたの夢、大阪国技館」

浅井三千治

春風にのって、ふれ太鼓の音が、淀の川面に、心地よく弾む。

相撲好き耳をすませば太鼓売り

相撲の太鼓は、大別して5つある。「明日は相撲があるのじゃぞ」と街をふれ歩く、ふれ太鼓。初日の前の土俵祭りの日に、土俵を浄めるために打つ、寄せ太鼓。朝早くから太鼓櫓の上から「ドントコイドントコイ」、「これから相撲が始まるぞ」と打つ、一番太鼓。そして今ではやらないが、関取衆が相撲場へゆっくりゆっくりと向かって行く風情をバチの音に乗せて打ったという、二番太鼓。相撲がはねた後、お客を出やすくするように「テンデンバラバラ、テンデンバラバラ」と打つ、はね太鼓。

今年の大相撲春場所は、北勝海の優勝で幕を閉じたが、若き貴花田の活躍、曙の連続勝ち越し18場所がかかる等話題も多く、15日間にわたって熱のこもった取組が、繰り広げられたのは、まだ記憶に新しい。

巨体をゆすって歩く相撲力士の姿は、今ではすっかり大阪の春の風物詩となっている。

この大相撲の国技館が京大阪を結ぶ京阪電車「関目」駅の近くにあり、往時は関取衆や見物客がゆきかい、賑わいのある相撲場風景が見られたというが、今ではこのことを知る人は、地元でも少ない。

女ひでりは晴天の十日なり

女性の相撲見物が解禁になったのは、明治5年からのことである。また明治42年6月に両国国技館が建設されるまでは、天井のついた相撲常設館はなく、小屋掛け晴天10日興行で、

雨が続けば40日から50日も掛かったこともあったという。

この両国国技館建設に刺激されて、各地に国技館が建設されたが、大阪に国技館が出来たのは、ずっと下って大正8年8月になってのことで、場所は新世界であった。その前年の大正7年4月には、大阪生まれの初めての横綱大錦大五郎が誕生している。

「—— そら見事な眺めやった。客もこの一番になると帽子から羽織、果ては財布まで土俵に投げる。ミナミやキタの芸者衆が、東西に分かれて声援し、興奮を一層盛り上げて——」という程、当時の大阪相撲の人気は高かった。しかし、その後大阪相撲は東西合併によって東京相撲に吸収されてしまい寂しくなる。

元々、相撲の本場は大阪であった。大阪相撲の歴史は、江戸相撲より古く、最初に大阪勧進(職業)相撲が催されたのは、赤穂浪士の討入のあった元禄15年4月と伝わる。大阪相撲はなくなってしまったが、いまも町名に「谷町」の名をとどめているように、大阪人の相撲好きには変りはなかった。

昭和12年に「関目」に建てられた国技館は、総工費100万円、4階建ドーム式、収容人員2万3000人で、当時隆盛を誇っていた両国国技館よりも大きいものであったという。この国技館建設にかけた、人々の地域発展への願いの大きさと意気込みの凄さがわかる。だが人々の期待とは裏腹に、関目の国技館では昭和15年まで7回相撲が行われただけで、とうとう本場所は開かれず、その後は倉庫となり、戦後の昭和30年頃に解体されてしまい、今では住宅公団関目団地となっている。

なお、京阪電車「関目」駅の由来は、国技館があり、関取の相撲があったことに因んでつけられた、と紹介しているものもあるが、「関目」駅が出来たのは昭和6年で、大阪国技館が建設されたのが昭和12年であるから、恐らく間違いであろう。「関目」の地名は、昔この地に関所があり、見張所があったことから、目で見ると関所の意で「関目」の名がついたという。

第16話 「うたかたの夢、大阪国技館」 完

図書館活用の手引き②

日本十進分類法

どこに、どんな本があるのか分類のしくみ

少年時代、学校の図書室に、よく足を運んだ。余裕があると、とりあえず覗いてみていた。それは妙に居心地のいいところだった。

書架の間を歩いてみて、まず気がつくことは、本の背に3段式のラベルが貼ってあることだ。これは、本の所在を表わす「請求記号」というものがタイプしてあるらしい。

最上段は、分類記号と言われ、数字がタイプしてある。だいたい3ケタから、少数点第3位のものまでの数字だ。

この数字は、日本十進分類法に基づいて与えられているようで、略称NDCと言ひ、本の主題によって、これが決定されている。

本の主題は、NDCの1ケタ目の0～9までの数字によって次のとおり10の分野に区分されている。これがさらに2ケタ目以降の数字によって細区分される。

- | | | |
|---|------|------------------|
| 0 | 総記 | (図書館、書誌学、百科事典ほか) |
| 1 | 哲学 | (心理学、倫理学、宗教) |
| 2 | 歴史 | (伝記、地理、紀行) |
| 3 | 社会科学 | (政治、法律、経済、教育ほか) |
| 4 | 自然科学 | (数学、理学、医学) |
| 5 | 技術 | (工学、工業、家政学) |
| 6 | 産業 | (農林業、水産業、商業、交通) |
| 7 | 芸術 | (美術、音楽、体育、娯楽ほか) |
| 8 | 言語 | |
| 9 | 文学 | |

2段目には、図書記号と言ひ、アルファベット1文字がタイプしてあり、作者や書名の頭文字だ。一番下の3段目には、上巻とか下巻、シリー

ズものなどの巻号がタイプされている。

請求記号とは、わかりやすく言えば、本のありかを示す手掛りのようなものである。そう言えば何となくわかったような気持ちになるが係員同士の暗号のようにも思える。そんなことは気にしないで、目にとまった何冊かを取り上げてみよう。()の中が著者と請求記号である。

まず、人間が本能的に持っている曖昧さを科学的立場から捉えた『ファジイ：新しい知の展開』(中村雄二郎ほか著 401 F)。

美浜原発の事故でその安全性が再び疑問視され、まだ記憶に新しいチェルノブイリの惨劇を綴った『危険な話』(広瀬隆著 543.49 H)。

これらはそれぞれ科学、技術の分野になる。

森林伐採などの環境問題をテーマとし、地球の環境保護を訴えている『Tree』(C.W. ニコル著 650.4 N)は、産業の分野となる。

そして昨年映画化され、少年の日の思い出を語った『白い手』(椎名誠著 913.6 S)は、文学の分野である。

僕にとって、少年時代に通いつめた学校の図書室は、知る喜びを教えてくれる屋根裏部屋のような暖かいところだった。

図書館は、あの頃の場所とは比べものにならないほど、広く、大きく、確実に機能しているように思われる。

知る喜びを得られるかどうかは、そこからまず一步、足を踏み出してみることである。

(整理係)

++++ 編集後記 +++++

◇新図書館長に、機械工学科の増尾教授をお迎えいたしました。館員一同、利用者とともに歩む図書館をめざして頑張ります。

◇新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。— 4月は、何かにつけて「Departure 出発」のとき。レポートや卒業研究等、本学の学生であれば避けて通れないゲートとは、「図書館の利用」と言えるでしょう。

大阪工業大学図書館報

No.25 (1991. 4)

編集発行 大阪工業大学図書館

〒535 大阪市旭区大宮5丁目16番1号
TEL 06-952-3131